



**十八年来の島んちゅの悲願
「甲子園出場」**

発表の日、センバツ決定を聞きつけ、島の人々が続々と監督のもとにお祝いに駆けつけたといいます。「よし坊、おめでとうね〜」。子供の頃から野球一筋だった伊志嶺さんをよく知る顔なじみのオジヤ、いつもさし入れしてくれる近所のオバヤ達も自分のことのように喜んでくれました。「それを見たら、これまでの野球人生やいろんな事が思い出されて、胸にこみ上げるものがあった。人前で初めて泣いたんじゃないかな」。甲子園出場——それは監督の情熱と努力、そして島の人達の温かい思いがひとつになって実現した奇跡でした。



**選手としての実績が
裏打ちする指導力**

生まれ育った石垣で小五から野球を始め、中高では内野手・捕手として活躍。大学進学後は外野手として準硬式野球で全国を制覇し、四年時には硬式野球で九州大会も制しました。卒業後に戻った石垣では、社会人野球初の完全試合を行った伝説も。その後は指導者の道へ。



「僕は島に育ててもらった。だから今度は恩返しをする番。島んちゅが島の子供達を育てるのは当たり前で、僕の場合はそれが野球だった。小学生チーム、中学硬式野球チームを次々立ち上げ、「小さな島でもやればできる」ことを全国・アジアの制覇、世界三位の戦績を通して教えてきました。現在の部員二十二名のうち、半数以上が少年野球時代の教え子。小中高の一貫指導が重要という持論を自ら証明しました。」

**不屈の精神が支えた
夢の実現**

二〇〇三年に市の要請で八重山商工野球部監督に再就任したものの、部員が二名になる苦境にも見舞われました。基礎練習やネットの補修をしながら、少年野球の教え子達が入学する春を辛抱強く待ち続けた日々。心を支えたのは宮古出身の両親から受け継いだ、「何くそ」というアララガマ精神でした。
自分が選手としては果たせなかった夢だけに「甲子園への思いは僕の方が絶対強い！」ときっぱり。「大声を出すのも、誰よりも早くグラウンドへ向かうのも、子供達とは毎日勝負だから」。その様子は監督と部員というより、同じ目標を志すライバルのよう。気持ちは常に十人目の選手で、チームを盛り立てるムードメーカーでもありません。おっとりとした独特の個性が持ち味のチームを分析し、「優勝は三十二分の一の確率だから可能性はある。課題はメンタル面でしょう。声を上げてモチベーションを高めたい」と語ります。
「小さな島からでも全国で通用するという自信は、きっと将来の力になる。僕もまだ人生の修行中」。春の甲子園に吹き荒れる「八重山旋風」に期待が寄せられます。



**念ずれば花開く……
野球は「生きざま」を作る教育の場**

八重山商工高校野球部監督 伊志嶺吉盛さん

「アホタレ、ちゃんと捕らんか!」。薄暗くなったグラウンドで怒鳴り声とともに繰り出される強烈なノック。声の主は八重山商工高校野球部監督、伊志嶺吉盛さん。三月に開幕する第七十八回選抜高校野球大会の出場校として、離島勢初の快挙である出場を実力で勝ち取りました。小さな島で実現させた大きな夢が全国から注目されています。



八重山商工高校野球部監督
伊志嶺吉盛さん

1953年、石垣市出身。八重山農林高校を経て沖縄大学へ。'72年に準硬式野球で全国二連覇。4年時に硬式野球で九州大会制覇。'78~83年八重山商工高校監督就任。'94年4月、八島小学校に「八島マリズ」を、'98年に中学硬式野球チーム「八重山ポニーズ」をそれぞれ設立、監督に就任。並行指導し、どちらも全国制覇に導く。ポニーズはアジア制覇、世界3位も達成。2003年より八重山商工高校監督再就任。第78回選抜高校野球大会出場決定。